DOWNTOWN通信

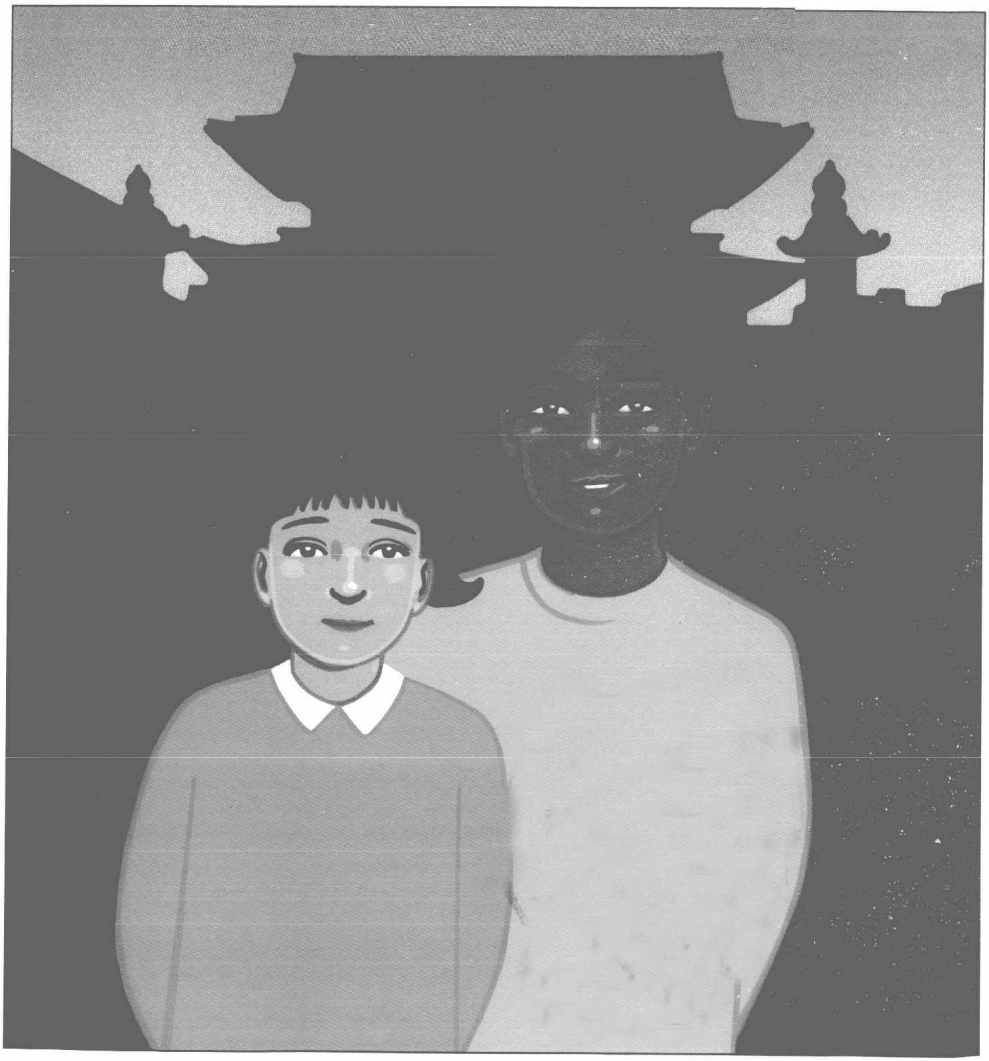
友だち貸します

石原てるこ・作　　永井　博・絵

DOWNTOWN通信

友だち貸します

石原てるこ・作　　永井　博・絵



心にのこる文学　2
DOWNTOWN通信
友だち貸します
1990年2月　第1刷

作　家・石原てるこ
画　家・永井　博
発行者・田中治夫
編　集・大熊　悟
発行所・株式会社 ポプラ社
〒160 東京都新宿区須賀町5
振替 東京4-149271
電話（編集）03-357-2216
（営業）03-978-0051
FAX 03-924-5341
印　刷・瞬報社写真印刷株式会社
製　本・石毛製本株式会社

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。
NDC913／166P／22cm ISBN4-591-03342-2
Printed in Japan ©石原てるこ　永井 博　1990年

十三歳といえばまだ子供だけれど、すべてが今までのようにはゆかなかった。

コドモというのは小学生までをいうんだろうか。だとすれば、小学生まではほんとうによかった。なにをしてもゆるされていた。

境内のそうじのふりをして賽銭のおこぼれを失敬しても、坊さんは目を地蔵にして見のがしてくれた。ほおずき市のときには浅草橋の問屋から駄菓子を仕入れて、ちゃっかり屋台を張ったりしていた。

テキヤのニーチャンやネーチャンは、コドモ屋台かい、がんばんなって、それだけだった。

1

「いいかい、こんど見かけたら、きみたちのご両親に電話するぞ」
と、オマワリサンがいった。
「でもぉ」
土屋はすがりつくような目で森進一に似たオマワリサンを見あげる。
「よせって」
ぼくは土屋を横目でにらんだ。なにをいってもどうせむだなんだ。
たしかに今までは見て見ぬふりをされてきたバイトだった。でも、もう、そうはいかない。それに気づかないぼくたちがバカだった。
すると、かわりに藤岡がかみついた。
「でもぉ、ローマでは子供が観光案内やってるんでしょ、世界中の観光地、みんなそうでしょ」
田代が藤岡の足をギュッとふんだ。
そして、直角におじぎして、大きな声であやまった。
「ほんとうにスミマセン！　もうシマセン！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田代につられて四人が合唱をはじめる。
「ほんとうにスミマセン！　もうシマセン！」
ぼくたちは雷門の大提灯の真下であやまりつづけた。はとバスの旗を先頭にしたご一行様がぼくたちの横を通りすぎてゆく。さげた頭を横にしてチラッと列を見ると、あちらさんは、これが東京の子供かあ、とジロジロめずらしそうに視線をはわせていた。
ぼくたちのあやまる声は、いつかその列の先頭にたつガイドの決まり文句にかきけされる。
「ミナサマ、ここが江戸の名残りを今につたえる東京の名所、浅草は雷門でゴザイマ～ス」
ぼくたちには、今、金が、必要だった。

浅草は年がら年中晴れている。曇りの日でも仲見世だけは晴れていた。それはきっと、人の賑わいと、店の軒をかざるノー天気な桜の造花のせいだろう。
ぼくたちは一時間ほどオマワリサンから説教をされて、やっと解放になったのだった。
「ガイドもダメ、テキヤもダメ！」
だらだら足をひきずりながら、土屋が脱力した声でいった。
「あーあ」
藤岡がため息をつく。

「ヒラノヤへいこうぜ」

ぼくは先頭にたって、ズンズン仲見世をくぐって歩く。「ヒラノヤ」は伝法院通りの焼き鳥屋。子供のくせに、と思われそうだが、そこはお花見の縁台のようにガタピシの長椅子を路地にだしていて、だんごを焼くように焼き鳥を炭にならべて売る店だ。そんな焼き鳥屋が両側に何軒もつらなり、一本の通りをつくっている。

ひとりずつのトレーを持ってテーブルにつくファーストフードよりも、よっぽど健康的なのだ。

仲見世をつっきって、左にまがった。

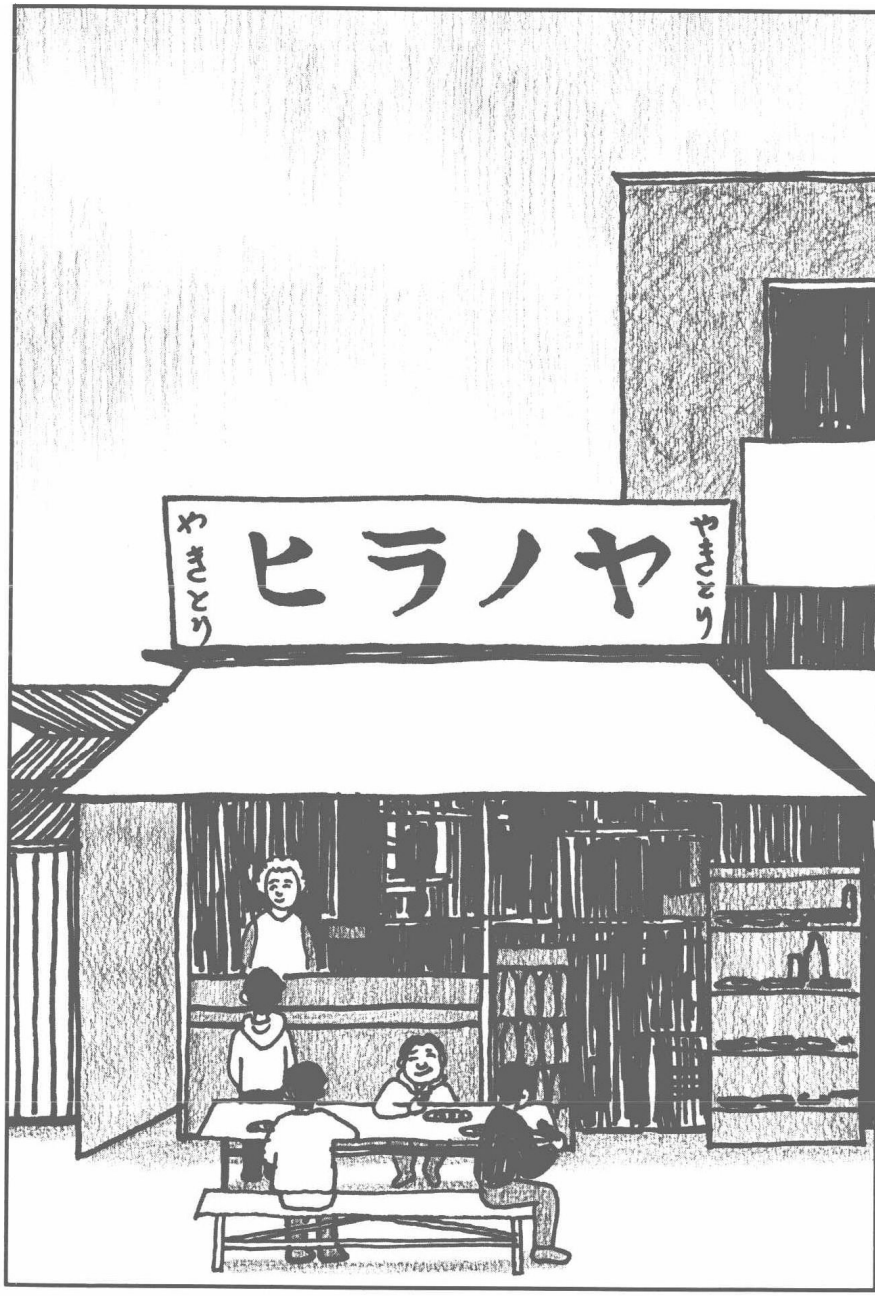
ポリエステルでできたケバケバしい着物や皮ジャンを売る露店がならんでいる。店はどこもひまそうだ。円高のせいだ、と、ここの人は口をそろえる。円高で外人観光客が買ってくれない、と。ぼくたちが外人を見てもめずらしいと思わなくなったように、外人のほうでもジャポニズムがめずらしくなくなったんだろう。

いつまでもおなじと思ってちゃいけない。

きのうと今日はちがうんだし、今日と明日はちがうんだ。きのうまでゆるされていたことが今日になってゆるされないということもある。

ちょうどさっき、ぼくたちがオマワリサンに説教されたことのように。

「今までは、見て見ぬふりをしていたんだよ」


やきとり
ヒラノヤ
やきとり

と、オマワリサンはいった。
「土地っ子だと知っていたしね。でも、もうきみたちは子供じゃないんだ。わかるだろ？　ガイドの仕事をするには労働省の許可がいる。税金も納めなくちゃならない。それに、かせいだ金をきみたちはなんに使う？　今までは、プラモデルやスケボーだろ？　もう大きいしなあ。そうなると、我われはきみたちのお金の使いみちまで心配しなくちゃならん。なぜ、そんなにお金がほしいんだ。きみたちの遊びはそんなに金がかかるのかい？　それともなにかほしいものがあるのかな？」
「弁償したいんです」
と、ぼくはこたえた。
「弁償？」
「――はい。弁償です」
ぼくたち四人は去年の三社祭りで寿町の子供神輿をぶっこわした。金は、その弁償のためだった。
「なんでこんなことになっちまったのかな――」
藤岡がいった。
「もとはといえば、田代と大野のせいだぜ」
「お、そういうこというのかよ」

「よせよ」
と、ぼくは田代をとめた。まあ、とめることもないか。
「おまえが一番わるいんだからさあ」
と、ぼくはいった。
「わかってるよ」
田代がショボンと下をむく。
藤岡はああいってるが、本心じゃないことくらい、田代が一番よく知っていた。が、ときどき思いださせてやらないと、田代はすぐに公明正大なほうへすわろうとするから、ちょうどいい薬なんだ。とはいえ、残り三人も、田代がいつも思いつくちょっとした悪事をたのしんでいる。
伝法院通りの「ヒラノヤ」で、ぼくたちは縁台にすわり、モツを二皿とつくねを一皿とって食べた。一皿、二本だ。お茶のおかわりをするときに、ここのオバサンが話しかけてきた。
「いつも仲がいいねえ」
すごく恥ずかしい言葉にきこえる。
「ええ。いま仲がわるくなったら、こいつがこまるんです」
と、ぼくがこたえた。田代はエヘヘとわらって用心ぶかく串に七味をふりかける。
もっとかけろよ、と土屋が田代のひじをおした。七味がドッとこぼれて田代は泣きそうな顔をす

る。もちろん、それはほんとうの泣き顔じゃない。ぼくたちはおたがい、メソメソに泣きくずれた顔を知っている。――それが、あの日。三社で子供神輿をぶっこわした日。その日から今日までの十か月半、ぼくたちはその弁償のために朝の新聞配達をつづけ（夕方の配達は希望者が多くてことわられた）、さっきはガイドでかせごうとしておこられた。

「もとはといえばおまえがわるいんだからさあ――」

田代をぬかした三人の声がぐうぜんかさなって、オバサンはわらいだした。ぼくたちもわらってはしゃぎそうになったが、急にあの日を思いだして、ピクピクほおがひきつった。

「わらえねえよ」

と、土屋がいった。

「わらうなよ」

と、藤岡がいった。

「わらってるとこ、稲さんに見られたくないよな」

と、ぼくがいった。

「家に帰ったらわらおうぜ」

と、田代がいった。

「バーカ、おまえは家でもわらうなよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田代をぬかした三人で田代をこづいた。
あの日からずっと、ぼくたちはこのようにみずからに謹慎を強いている。
あの日までのいきさつを思うと、ぼくは今でも冷や汗をかく。
今日は学校から帰って着かえて家をでるとき、おねえちゃんから釘をさされた。
「どこへいくの」
監視されているような気がした。
「田代たちと、チョットね」
「もうけぐちの相談ってわけ」
おねえちゃんはぼくより五つ年上の十八歳。このあいだ手拭の絵のモデルになったとかでチョットばかし美人なのを鼻にかけている、いやな性格だ。
「そうなんでしょ？」
「そ、そうだよ」
「ま、せいぜいがんばってね。貸してあげたいけど、わたしも春もののワンピース買っちゃったしさ。それに、もうとっくにひねりだしたんだとばかり思ってたわ。——とにかく、このままじゃすまされないんだから。三社まであと一か月とちょっとよ。稲さんは子供神輿をまたつくってるっていうじゃないの。だめよぉ、あまえちゃあ。あんたも男なら自分たちのやったことに落とし前つけ

るべきね。じゃないと――ここにいられなくなるわよ」

……いうことにいちいち思いやりというものがない。そんなこと、ぼくはちゃんとわきまえている。しかも、そんな大口たたける立場じゃないということも、わきまえている。おねえちゃんからなにをいわれても、だからぼくはだまって家をでた。

ここは、浅草。浅草は結束のかたい街だ。

結束が好きで、結束の国から結束を広めにきたような人たちがあつまっている。

おととしできたのが浅草六区を再興する会。そのつぎの年に浅草芸人を守る会。ほかには、サンバ同好会、仲見世のれん会、江戸伝統工芸職人会、浅草観光振興会、地域環境保全会、そして、三社祭りの寄り合い会。

ここにいられなくなるというのは、これらすべての会からしめだされるということだ。ほんと、歩けなくなる。

ぼくの家は商売ではなく、父親はふつうのサラリーマンで、母親はふつうの主婦だけど。

父親と母親は、あの日のことを二千人をこえる見物客にまじって見ていたらしい。

おねえちゃんはハッピを着て大うちわで山車にくわわっていたのだから、とうぜん、一部始終をまのあたりにした。

すべては去年の三社で興奮しすぎたぼくらがいけなかった。神輿職人の稲さんが精魂こめてつ

くった子供神輿。何十年もまえに寄進された歴史的なそれを、ぼくたちは大人になる記念にこわしちまった。――こわすつもりはなかったんだ。……ほんとうだよ。

稲さんは弁償するというぼくたちをことわった。でもそれじゃ、ぼくたちの行き場がなくなるんだ。誠意の行き場が――。だって、そうだろう？　弁償していらないといわれて、ハイそうですかってオメオメひきさがるわけにはゆかないじゃないか。子供神輿をどんなにぼくたちがだいじにしていたか。だから、あんなことになっちまったんだ。けど、バカだった。ぼくたちが。

稲さん……スミマセン。ぼくたちは稲さんを尊敬しています。子供神輿を愛しています。

どうしても最低百万はぼくたちの手でつくって、稲さんにおわたししたいと思います。でなきゃ、ぼくたちはずうずうしく大人神輿にくわわれません。大人に……なれないんです――。大人に――なりたいんです。

去年の春、ちょうど一年まえの今ごろだった。ぼくたちは祭りの長老をしている稲さんから、びっくりするようなことをきかされたのだ。稲さんは日本中の神輿を依頼されてつくっている祭り神輿の職人である。が、一年に一台、せいぜいが二台。

弟子はとらない方針なのか、ときどき若者がたずねてきても、わらって首を横にふるだけという一徹者だった。

稲さんの仕事場は、広すぎる土間。

つづきの奥の間は窓のない小部屋で、昔はうるし職人もおいていたという。
近年、分業になってからは少しょうもてあまし気味のその土間を、ぼくたちは雨ふりの日の遊び場に提供してもらっていた。たぶん――弟子をとらないのも方針などではなくて、人を使うほど仕事がないというところなのだろう。
仕事場で稲さんはいつもひとりっきりだ。その背中は小さく見える。
ふだんは色の浅黒い酒好きな、ただのジャンクなおじいさんだが、それが寄り合いや祭りのときになると、とたんに背筋をシャキンとのばして、身長も肩幅も二倍に見せる。
近所の子らは「稲さあん」と呼ぶが、ぼくらはその凄さを知っているので、「稲さん」と呼んだ。短く。尊敬をこめて。
稲さんは祭りの長老のほかにも、江戸伝統工芸職人会の会長、地域環境保全会の専務理事を兼ねている。浅草になくてはならない人だ。その肩書きの多さは、仕事場にいるときの地味に銅板を切りぬいたり、カンナをかけていたりする稲さんからは想像もつかない。稲さんはおりたたみ式の傘に似ている。自分の骨のギアチェンジを可能にしている。仕事場では淡たんとしていてやさしくて、寄り合いのときには威厳があって迫力がある。
ぼくたちがその話をきいたのは仕事場でのことだった。だから、そのときの稲さんは、きれいにたたみこんだ傘のように小さくてやさしいおじいさんだった。

「来年から、おめえら、大人神輿をかついでもいいぜ」
稲さんは仕事の手をやすめて一服しながら、そういった。
「ウッワー！　ほんとうですか!?」
「おうよ。今まで、よおく子供神輿のめんどうをみてくれたし、な。いや、よくやってくれてるっていってるんだぜ、実際、ほかの連中もよ。まあ、見たところからだもできてきたようだし、高校生になるまで待つこともあんめえよ。来年はカアチャンにいって、新しい装束を買ってもらうんだな。あ、ワラジはいいぜ。元服の祝いだから、寄り合いからだしてやらあ。四人分、な」
ぼくと田代と土屋と藤岡は先をあらそってほうきをとった。いきなりおべんちゃらを使ってセッセと仕事場をはくぼくたちに、稲さんはわらいながらいった。
「だから、子供神輿は今年の三社で卒業だな。しっかり露払いをつとめるんだぜ！」
田代は調子にのって、「せいやっ！」とこたえた。

さいごの子供神輿をかつぐ三社のその前日。田代がうちに電話をよこした。そのとき、ぼくはちょうど明日のための祭り装束をひととおり着こんで、姿見をにらんでいた。夕方、とおりがかりにのぞいた雷門あたりはすでに見物人制御用のロープがはられていて、奥の参道のほうでは露店を組む人たちが蟻んこのようにいきかっていた。そんなことでもうワクワクしてしまい、ぼくも

いてもたってもいられなくなり、夕食まえに翌日の準備点検をしてみたというわけだ。稲さんはきっと、旧仲見世に急ごしらえした長老の寄り合い所で早ばやと盃をくみかわしていただろう。

鏡のなかのぼくは、おそまつだった。

腹掛けもパッチも、ピチピチの寸足らずになっていた。なによりも白無地のキャラコの鯉口が気にくわない。粋じゃないと思った。

やたらご清潔そうで、坊ちゃん坊ちゃんしてて——。

来年は、はでなダボシャツを買うぞ！　そう思った。墨田川というなるとのような柄や、菱文というれんがのパズルのような柄。竜のうろこのようなやつもいい。

いまいましい白無地とは明日でお別れ。そうすると、こんどはすこし泣けてくる。田代の弟にでもやろうか。そう考えていた。

「なにしてた？」

と、電話の田代がいった。

「なんにも。いまさぁ、足袋が合わないんじゃないかと思ってはいてみたらさ、なんだかパッチもはきたくなって、それで」

「ハハハーッ！　おんなじ、おんなじ！　おれも上から下まで着てみたんだ。もう小さいだろ」

「そうそう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com